

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23246

研究課題名（和文）南アフリカの人種的秩序の変遷に関する社会学的研究：アジア系住民の中間性に注目して

研究課題名（英文）Sociological Studies on the In-betweenness of Asian Immigrants/Residents in the Racial Hierarchy of South Africa

研究代表者

山本 めゆ（YAMAMOTO, Meyu）

日本大学・文理学部・助手

研究者番号：40843743

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀後半からアパルトヘイト体制が終焉を迎える1990年代初頭までを視野に収め、レイシズム研究、白人性研究の立場から、アジア系移民／住民の位置の変容と現地社会との交渉を検討した。とりわけ重点的に注目したのは、南アフリカに暮らす日本人を指す呼称として使用されていた「名誉白人」概念である。この概念の起源や受容の再検討を通じて、「名誉白人」概念が19世紀後半からのトランスナショナルな白人意識の形成と密接に結びついていたこと、待遇改善を目指す彼らの諸実践がときにはアフリカ人社会との葛藤を招来しつるものであったことを明らかにし、中間性の重要な一側面として位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、アフリカ-アジアという枠組みが再活性している。学術研究の世界でも重要な研究成果が相次いで出版されるとともに、大規模な学術研究ネットワークや国際研究集會も設立・開催されるようになった。それに伴い、南アフリカの人種の序列において入植者／ヨーロッパ系住民とアフリカ人との中間に置かれてきたアジア系移民／住民への関心も高まりつつある。彼らは当地の総人口の2～3%を占めるに過ぎないが、その差異化戦略が社会の人種化に強度を与えるものとして積極的な観察の対象とする研究も現れている。本研究は、日本のアフリカ研究の立場から本領域の推進に貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：In recent years, growing attention has been paid to Asian immigrants/residents in South Africa, specifically characterised by the in-betweenness in the country's racial hierarchy. This project aimed to investigate how Asian minorities were racially constructed in South Africa from the late 19th century and explored their negotiations with local society within a transnational framework of sociology. In the project, special efforts were made to reconsider the 'honorary white' status, purportedly afforded to the Japanese by the South African government during the apartheid period. In pursuit of the goal, archival materials, parliamentary records, and newspaper articles were examined. Three suitable informants were also interviewed. By examining the origins of the 'honorary white' status and its interrelated logic of inclusion and exclusion, the project revealed that the genesis of the concept was closely linked to the transnational formation of whiteness from the late 19th century.

研究分野：社会学

キーワード：レイシズム 白人性 人種編成論 中間性 南アフリカ アジア系移民 アフリカ-アジア関係 排外主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) アフリカ-アジアという枠組み

今日、アフリカ-アジアという枠組みが再活性化している。1955年に開催されたのちに長らく中断していたバンドン会議も、2005年に50周年記念会議、2015年に60周年記念会議が開催されている。学術研究の世界でも、2000年代以降には、ヴィジャイ・プラシャドの精力的な仕事が発表されるとともに、両地域の研究者が参加する本格的な共同研究がいつそう盛んになった。アリ・マズレイとセイフディン・アデム編 *Afrasia: A Tale of Two Continents*、ペドロ・ラポーゾ、ディヴィッド・アラセとスカーレット・コーネリセン編 *The Routledge Handbook of Africa-Asia Relations*、スカーレット・コーネリセンと峯陽一編 *Migration and Agency in a Globalizing World* といった重要な研究成果が出版され、さらにはヨーロッパの研究機関が先鞭をつけるかたちではあるものの、大規模な学術研究ネットワークや国際研究集會も設立・開催されている。日本で2018年に発足した学会 Japan Society for Afrasian Studies にも、日本の研究教育機関に所属するアフリカ人研究者が多数参加している。これらは従前の人文・社会科学においてスタンダードとされてきた西欧中心の学術研究を「地方化」し、アフリカとアジアとの連帯がもつ潜在力を再評価する役割を果たしてきた。

ただし、アフリカ-アジア連帯への願いに突き動かされれば、両地域とその人びとの交流の贅美に偏り、人種的秩序ゆえに生じていた人びとの距離や葛藤に目をつむることになりかねない。一例を挙げれば、近年アフリカ各地では、南アフリカ時代のガンディー(1893~1914)がアフリカ人を劣った人種とみなす「レイシスト・アイデンティティ」の持ち主であり、イギリス帝国によるアフリカ支配に手を貸した共犯者でもあったとして、ガンディー像が撤去されるような動きが広まっている。

(2) 19世紀後半からのトランスナショナルな白人意識の形成について

近年のレイシズム研究・白人性研究においては、19世紀後半から20世紀初頭に活性化したアジア人の国際移動に着目し、彼らの到来に反発した白人入植植民地の連携によって再編されたグローバルな白人意識への関心が高まっている。本プロジェクトで注目する南アフリカもそのような舞台の重要な一角をなす。ただし、アジア人に対する排斥のみに注目した従来型の黄禍論研究では、階層分化された南アフリカにおいてヨーロッパ系住民とアフリカ人との中間に置かれてきたアジア人の中間性や、アフリカ人とアジア人との葛藤が見えづらくなってしまふ。これらの課題を解消するには、アジア系住民の位置の変遷や、その中間性ゆえに選択される差異化戦略が社会の人種的秩序に強度を与えうるといふ両義性を批判的に解明する必要があった。

2. 研究の目的

上記を踏まえ、本研究では、南アフリカにおいて中間層に位置づけられてきたアジア系住民について、彼らの抵抗・交渉・同調・迂回といった諸実践が当地の人種的秩序に与えた影響を、南アフリカ国内の現象としてではなくグローバルな人種編成史のなかに再定位しながら検討することを目指した。とりわけ重要な事例として注目したのが、「名誉白人」概念である。1970年代後半よりアパルトヘイト廃絶に向けて西側諸国が経済制裁を強化するなか、日本は1980年代に対南アフリカ貿易高で世界一を記録、国際社会からの非難を集めることになった。その際、南アフリカで本来白人のみが居住を許されているはずの地域に日本の企業駐在員らがコミュニティを築き、「名誉白人」と呼ばれてきたことが知られるようになる。「日本人は貿易関係を通じて

南アフリカを支援し、その見返りとして白人待遇を獲得したのではないか、それは隔離体制の許容や追認、加担ではないか」といった批判も噴出した。しかし、「名誉白人」という呼称の起源や南アフリカでの受容、そして「名誉白人」と呼ばれた人びとの自画像（彼らが自身の地位をいかに理解していたのか）についての学術的調査や検討はほとんど行われたことがなかった。従来レイシスト国家と日本との例外的かつ特異な友情の産物として理解されてきた待遇を、19世紀後半からのトランスナショナルな白人意識の形成史に位置づけ、彼らと南アフリカ社会との交渉を社会学的に検討した。

3. 研究の方法

(1) 文献検討：重点的に取り組んだのは、社会学におけるレイシズム研究において長らく軽視されてきたトランスナショナル空間における人種編成に関する検討である。S.スプラフマニーム『接続された歴史』に代表されるグローバル・ヒストリーの潮流やG.バンブラのConnected Sociologiesの卓見を援用しながら、南部アフリカ地域に上陸したアジア人の位置の変遷を検討することで、グローバルな空間における社会学と人種主義研究の実現を目指した。中間性をめぐっては、ミドルマン・マイノリティ論、ソジョナー研究、入植者植民地論、Racial Triangulation論等の検討を通じて、中間層に置かれた移民たちとホスト社会の関係についても再検討を行った。

(2) タイムスパン：南アフリカの地にアジアからの移民集団が姿を現す19世紀後半から、20世紀末にアパルトヘイトが廃絶され、民主化を遂げるまでの期間を視野に収めた。19世紀後半にはまずインドより年季契約労働者が到来、さらに比較的教育水準が高く裕福な旅客(passenger)移民と呼ばれる人びとも南アフリカに上陸した。中国からは、19世紀後半より商人らが、20世紀初頭には年季契約労働者が到来した。日本からは、インドや中国からの移民に比べると圧倒的に小規模ではあるものの、19世紀末ごろより商人らが姿を現すようになる時期となる。

(3) 日本人を対象とするインタビュー調査：スノーボール・サンプリング法により依頼を進めた。本プロジェクト下では3名のインタビューを実施した。

(4) 中華系住民を対象とするインタビュー調査：南アフリカで実施することを予定していたが、本プロジェクト下では断念した。

4. 研究成果

上記の調査をもとに、従来はアパルトヘイト期に南アフリカ-日本間の貿易関係によって誕生したとして説明されてきた「名誉白人」概念が、19世紀後半からのトランスナショナルな白人意識の形成と密接に結びついていたこと、待遇改善を目指す彼らの諸実践がときにはアフリカ人社会との葛藤を招来することもあったことを明らかにした。

少数派による多数派支配という脆弱さと不安定さという根源的な課題を抱えていた南アフリカでは、緩衝的な位置づけである中間層が統治の安定化の道具として利用されるような余地を生んだ。多数派に対する徹底した抑圧によって生じた巨大な経済的空洞は、中間的な人びとに利益をもたらすことになったが、このような状況は、とりわけ「文明化」されたエリートのアジア系住民には社会的上昇を期待させるものだった。アジア系の人びとは、インド系、中華系、日本人ともに、それぞれに高い文明性を自負していた。「文明」という概念の利用は、ヨーロッパ人を進化の頂点とする人種主義の枠組みを逆手に取りつつも、それ自体が「野蛮」の存在を前提とする序列化のロジックでもある。ヨーロッパ人を頂点とする人種主義の序列に抗しながらもそれに同調するものであり、アフリカ人ら他の「非-白人」と共有可能な基盤を空洞化する危うさを孕んでいた。

本プロジェクトでは、当初計画していた南アフリカとイギリスでのデータ収集は断念せざるを得なかったものの、英語の査読付き論文 1 件 (Meyu YAMAMOTO, 2022, Honorary Whiteness as a Relational Construct: Ethnoracial Formations of Japanese and Chinese in Apartheid South Africa, *Social Theory and Dynamics*, vol. 3: 15-22) 日本語の査読付き論文 1 件 (山本めゆ、2021 「連なりあう移動、連なりあう人種化 人種主義研究におけるトランスナショナリズムの実装とその課題」 『研究紀要』(日本大学文理学部人文科学研究所) 第 101 号: 43-60) 日本語の単著 1 件 (山本めゆ、2022 『「名誉白人」の百年 南アフリカのアジア系住民をめぐるエスノ-人種ポリティクス』 新曜社) 等の成果発表につなげることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山本 めゆ	4. 巻 60
2. 論文標題 書評：Pedro Miguel Amakasu Raposo de Medeiros Carvalho, David Arase and Scarlett Cornelissen, eds., Routledge Handbook of Africa-Asia Relations.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア経済	6. 最初と最後の頁 81～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24765/ajiakeizai.60.3_81	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本 めゆ	4. 巻 15
2. 論文標題 <ジェンダーをめぐるキーワード> 『引揚げ』とジェンダー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 35～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 山本めゆ	4. 巻 101
2. 論文標題 連なりあう移動、連なりあう人種化 人種主義研究におけるトランスナショナリズムの実装とその課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究紀要（日本大学文理学部人文科学研究所）	6. 最初と最後の頁 43～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Meyu YAMAMOTO	4. 巻 3
2. 論文標題 Honorary Whiteness as a Relational Construct: Ethnoracial Formations of Japanese and Chinese in Apartheid South Africa	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Social Theory and Dynamics	6. 最初と最後の頁 15～22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山本めゆ
2. 発表標題 ガンジー像撤去要求運動『Gandhi Must Fall』の考察 南アフリカ史のアフリカナイゼーションとその余震
3. 学会等名 第56回日本アフリカ学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本めゆ
2. 発表標題 インターセクショナリティの視点で見る日本帝国体制下の戦時性暴力問題 語りが内包する多元的視点への注目・元満蒙開拓団の女性の事例から
3. 学会等名 第92回日本社会学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本めゆ
2. 発表標題 南アフリカでの経験を通して「グローバル社会学」の課題を検討する
3. 学会等名 日本大学社会学会大会100周年記念大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 蘭信三・吉川元・川喜田敦子・松浦雄介・西脇靖洋・佐原彩子・山本めゆ・坂田勝彦・野入直美・崔徳孝・李淵植・中山大将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 352 (172 - 195)
3. 書名 『引揚・追放・残留 戦後国際民族移動の比較研究』	

1. 著者名 金富子, 小野沢あかね, 梁鉉娥, 李娜榮, 古橋綾, 川田文子, 梁澄子, 大門正克, 宮本節子, 宮城晴美, 山本めゆ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 284
3. 書名 性暴力被害を聴く 「慰安婦」から現代の性搾取へ	

1. 著者名 松田素二, 阿部利洋, 井戸聡, 大野哲也, 野村明宏, 松浦雄介, 李洪章, 翁和美, 森田次朗, 安井大輔, 井口暁, 西村大志, 山本めゆ他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山代印刷	5. 総ページ数 372
3. 書名 日常実践の社会人間学 都市・抵抗・共同性	

1. 著者名 山本めゆ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 256
3. 書名 「名誉白人」の百年 : 南アフリカのアジア系住民をめぐるエスノ-人種ポリティクス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------